

3. ランダム選択で運勢占いをする

偶然を楽しむ遊びである。1 - 4 番目のリレージャックにボイス・メモをつなげる。「大当たりー。おめでとう。」「当たりです。やったね。」「ブブー。外れです。残念でした。」「もう一度やってください。」等を入れておくと、くじ引きや運勢占いに使える。スイッチを入力する度に何が出てくるかわからないところに飽きがこない。ジャンケン遊びで使うのであれば「グー」、「チョキ」、「パー」を入れればよい

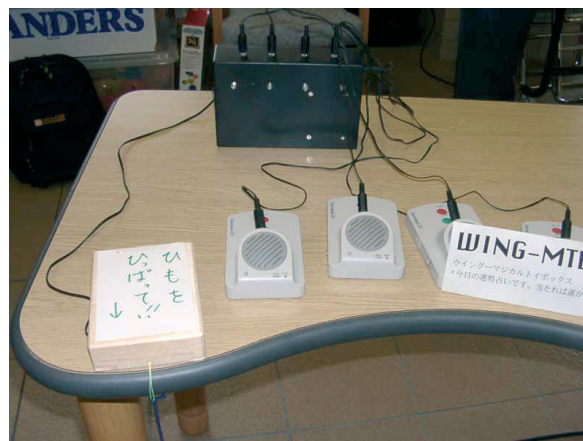


図3-1-6 Wing-MTB ランダム選択モード
点滅がランダムに止まった出力のVOCAから
メッセージが出る。

4. 逐次選択でリモコン自動車を動かす

逐次選択機能が、自動スキャン選択機能と違うところは、スイッチを入力するたびに、次のランプに移動してリレー出力も逐次に移行していく点である。このモードを利用するとリモコン自動車を1スイッチで操作できる。1番目のリレージャックに回転のボタン、3番目のリレージャックに直進のボタンにつなげると、スイッチを入力する度に、「回転」（方向選択）→「休止」→「直進」→「休止」と操作できるので、任意の位置に移動することができる。

3 - 2 卒業後の通所施設における実践事例

社会福祉法人みなと舎・ゆう 援助課長
山本 修子

3 - 2 - 1 卒業後はどこへ

一般的には、義務教育が終了すると、進学か就職かを選択する。高等学校へ進学した者は、卒後、専門学校・短大・大学・就職・フリーター等選択肢が更に広がる。勿論何もしないという選択も可能である。（本人の意思や個性、本人の力によって選択できる）

ところが、重いハンディがあると、養護学校を卒業すると本人の意思にかかわらず、選択どころか通う場がなくなってしまう。学校時代で過ごす時間より、何倍も長い卒後の時間。社会の側に受け皿がないという現状に、日本の福祉のお粗末さをつくづく感じる。

3 - 2 - 2 「こどものへや」から「ゆう」へ

卒業＝在宅 これではいけないと、何人かの家族が行動を起こして、障害者地域作業所「こどものへや」を立ち上げた。しかし、作業所ではハードな面とソフトな面を含めて限界を感じ、施設設立に向けて5年間奔走。法人格を取得して、念願の施設建設の運びとなり、平成10年8月、母体「こどものへや」から「ゆう」が出航した。

「ゆう」は重度重複障害者（重症心身障害者を含む）を対象としているが、制度がない

為、知的障害者通所更生施設で認可を受けている。

定員40名で、現在は医療的ケアを必要とする人8名を含め、29名が通所している。

3-2-3 シンプルテクノロジーとの出会い

「ゆう」が開所して数カ月後、まだまだ施設は落ち着かない時ではあったが、今回のプロジェクトの石川先生が来て下さる事により、メンバー（「ゆう」では、通所する利用者をこう呼びます）は勿論、スタッフにとっても大きな刺激になった。

人間は、時と場合によっては、理屈抜きで「楽しい」と感じる事が大切だと思うが、先生はまさにそのスタイルで「ゆう」に飛び込んで来て下さった。先生が持参するケースボックスの中には、メロディーが流れる駒、動く縫いぐるみ、野球ゲーム、ミニ楽器、はたまたマッサージ器と、色々な物が沢山入っていて、まるで魔法のボックスのようである。又先生の手が随所に加えられていて、先生のアイディアと工夫と情熱には感激しきりであった。そして、それらを通して過ごす時間は、大変楽しいものとなった。

3-2-4 導入の大切さ

「楽しい」と感じると、人間は不思議と力が湧いてきて、チャレンジ精神やこの人ともっと関わってみたいという気持ちが芽生えてくる。いつか新聞で読んだ記事の中に、癌患者の治療に、寄席や漫才など笑いを治療に取り入れる事で、治療効果が上がるというものがあった。笑いは生きる力をつけることにつながるのかもしれない。

メンバーが「楽しい」と感じ、笑顔が出ると、それを側で感じ取ったスタッフも、楽しさを共有し笑顔が出てくる。また石川先生とメンバーの活動を見守る立場から、「これはメンバーにとって良いかもしれない」と、私たちの好奇心や興味が高まり、スタッフも参加したくなるのである。

図3-2-1 回ってるよ。

3-2-5 導入からメンバー理解へ

石川先生が、月1回のペースで「ゆう」に来て下さるようになり、メンバーの表情に変化が表れてきた。「今日はどんな事をして遊ぶのかな」と期待顔のMさん。慎重派のSさんは、「怖いのは御免だ」とばかりに、先生の準備する姿をチラチラ見てチェックする。先生に声を掛けられ、にっこり笑顔で応える人もいれば、素通りされて、肩すかしをくらったような表情のTさんもいる。

又、メンバーは眠くて眠くて先生の働き掛けに応じられない日もあり、その日の体調や気分によってもかなり左右される。そんな一人ひとりの個性を大切に、手探りの中から少しずつ少しずつメンバーを理解し、歩んで来られた先生だが、その様子を見ていて「先ず人ありき」を再認識させられた。これがもし、いきなり理論を頭ごなしに説明されたり、「これはいいものだから」と押しつけられたら、大変苦しいことになっていたように思う。

3 - 2 - 6 一人ひとりにあわせて？

メンバーと活動する回数を重ねていくと、メンバーの興味や関心、得手・不得手、現在持っている機能の様子が掴めてくる。それにあわせて、先生のケースボックスの中身も変わってきたり、改良してまたメンバーに働き掛ける。そんなキャッチボールを続けながら、よりメンバーにあった物を準備するという繰り返しであった。ここまで来るのに約2年がかかったように思う。

図3-2-2 音の出る駒を回して楽しむ。

3 - 2 - 7 スイッチを使った活動の紹介

【音楽】

ある施設に見学に行った際、見学中ずっと童謡が流れていて、職員の説明によると皆童謡が大好きとのことであった。だが果たしてそうだろうか？ハンディのある人が皆童謡が好きなのではなく、童謡が好きな人もいれば、演歌やロック・クラシック・ポップスが好きな人もいると思う。ただ、色々な音楽に触れる機会が少なかったのと、好きな音楽を選択したり、意思を表示する術がなかったからではないかと思う。

図3-2-3 音楽を鑑賞する。

「ゆう」のMさんは、クリスマスソングが大好きで、春でも夏でも季節を問わず聴きたい時は聴いている。カセットデッキにレバー型のスイッチを接続し軽く指を動かして操作している。筋力が著しく低下しているMさんにとっては、大変使い易いスイッチである。又Mさんはとても茶目っ気のある人で、スタッフが気持ち良く口ずさんでいると、突然スイッチをオフにする。スタッフががっかりすると又スイッチをオンにする。そんな風にオン・オフを繰り返して、スタッフの反応を楽しみ「えへへ？」と笑うのである。スイッチにより、スタッフとのやりとりが更に楽しめるようになったMさん。と同時にスイッチが無かったら、クリスマスソングは、スタッフが冬だけしかかけなかったかもしれない。

みんなが集まってプレゼント交換のとき、Mさんがリードをとってスイッチで音楽を流している間に、みんながそれぞれのプレゼントを順に隣の人に渡していく。Mさんは音楽を流したり、止めたり、その度に周囲から歓声があがる。まるで自分がプレゼンターになった気分である。

図3-2-4 プレゼント交換のプレゼンターになる。

【料理】

食べることは楽しく、特に自分達で作ると楽しさも倍増する。「ゆう」では、誕生会やクリスマスの時によくケーキを作るが、それ以外でも、散歩で取ってきた桑の実や梅をジャムにしたり、畑で収穫したさつま芋やかぼちゃを使ってデザート作りをしている。

この時大活躍するのが、ハンドミキサー系のメンバーである。ハンドミキサーの回転が増すにつれ、泡立ちは勿論甘い香りが立ちこめて、メンバーの視線はボールの中に釘付け。時には、早く味見がしたくてスイッチの操作が疎かになり、スタッフが「頑張ってる」とエールを送ったり、「失敗したら○○さんの責任よ」と笑い合ったりして会話も弾む。又メンバーのスイッチの加減によってその日の出来映えも違ったり、毎回刺激があるのである。

【裁縫】

ある日、バザーで何を出品しようかと相談していたところ、メンバーの一人から、「雑巾を縫って売ってみたい」という声が上がった。雑巾を縫う???一瞬戸惑ったスタッフだが、卓上ミシンにスイッチをつなげてみたらというアイディアが浮かび、即実行することになった。布を押さえたり、針の操作はスタッフが、メンバーは電源のスイッチ係と協同作業である。メンバーによっては、ミシンの付属のペダル式のスイッチを、お尻で押ししたり、足の小刻みな動きの得意なSさんは、足でカタカタと押している。

当初時間が掛かるのではと思われた活動だが、瞬く間に仕上がり、得意な人は一日に何枚も仕上げていく。用意したタオルがすぐ無くなり、寄付を募ったところ、地域の方々が段ボール箱で届けて下さり、地域の方々とのつながりもできてきた。又バザーでの売れ行きも好調で、メンバーの励みにもなっている。

但し、全てが上手くいった訳ではない。電動ミシンはスピードがとても速いので、ちょっとした弾みでスイッチが入り動き出してしまふ。スタッフがケガをした事もあり、スタッフの手元にもスイッチを取り付け、二重にしてロックがかかるように工夫を加えた。

【マッサージ】

手のひらサイズの小型のマッサージ器や、健康コーナーなどに置いてある市販のマッサージ器（これは、揉む・叩く・振動など種類と強弱が選べる）にスイッチを接続して、メンバー同士やスタッフとマッサージをしよう。マッサージ器が動くと、気持ち良さそうに身を任せる人から、ビックリしたり、くすぐったくて体から離そうとする人、振動と共にゴホゴホと痰が上がって、排痰につながる人と表情も効用も様々である。

ある時、近くを通りかかったお母さんにマッサージのプレゼントをしたところ、『子どもに気持ちの上で貰うものは沢山あったけれど、実際に何かやってもらうということがなかったから、すごくうれしい』とコメントをいただいた。スイッチは、メンバーを親孝行にもしてしまうのである。

【電動スクーターボード】

メンバーの移動手段は殆どが車椅子である。電動車椅子に乗っている人が2～3名いるが、それ以外の人手動式でスタッフが介助している。

そんな中へ、電動スクーターボードが「ゆう」にやって来た。

初試乗の日は大変な騒ぎであった。それは、電動車椅子に乗れない人でも、スイッチ一つで動く乗り物だからである。とりわけMさんとSさんには大変な衝撃だったようである。Mさんはスクーターボードが動き出すと、目が落ちるのではないかと思われる程見開き、

『やめて?、怖いよ?』『助けて?』『ぶつかる?』と絶叫。スタッフが心配して止めようとすると、『いやだ?、もっとやる?』との要求で、一同大爆笑であった。

次にSさんだが、やはり恐がって、足をバタバタさせ『あーあー』と大きな声で必死に恐さを訴えていた。スタッフには、こんなにも自分の意思を強く表現する二人の力に、改めて驚かされた日であった。

最初は恐がっていた二人だが、何回か乗って慣れてくると、自分の意思で移動出来る喜びへと変わっていった。Mさんは、エレベーターに乗って2階まで行き、たくさんの人に得意気に見せて回ったり、Sさんは、周りの景色を楽しむ余裕が出て来て、時にはそのまま外に行ってしまうこともある。

又、スクーターボードは応用が利きやすく、うつ伏せ・仰向け・座位と何でもOK。時にはSRCウォーカーと合体させて、視点が高くなるようにもしている。多くのメンバーに愛用され、時には、順番待ちになったり、充電が間に合わなくて、途中で動かなくなることもある程人気が高い。

図3-2-5 電動スクーターボードでサーフィンする。

3 - 2 - 8 「ゆう」からのメッセージ

「ゆう」が今回のプロジェクトに参加させていただいた意義は大きく、感謝の気持ちでいっぱいである。感謝の気持ちと共にささやかなメッセージを発信出来ればと思う。

一つは、乳幼児期・学齢期に関わっている様々な機関などのスタッフや、学校教員の方々に、「卒業後の人生をどう送るか」は卒業後から始まるのではなく、今関わっている時から始まっており、関心を持ってほしいこと。

二つ目は、ハンディがあることで、生活の様々な面に制約があり、生きにくいと感じることがあるが、それは本人の責任ではなく、社会のしくみがハンディのない人を中心に考えてつくられて来たからである。一生訓練を受けて無理矢理ハンディの無い人に近づくのではなく、重いハンディがあっても、今その人が持っている力を活かして、生き生きと生活出来たら・・・。又、その為に施設の環境を整えたり、スタッフがしっかりと寄り添ってサポートすることが望まれると思う。